



佛國政法畧

1022



414
A2761

佛國政法畧緒言



此書ハ一千八百六十二年佛國刊行「モウリス」
ロック氏ノ所著政法字書中ヨリ抄取スル者ニ
テ彼國政法ノ大略ヲ知ルニ足ル其目次ハ左
如シ

大正十一年四月
隈野寄贈

第一章 總論

第二章 行政權ノ總論及行政權ト他

大權ト、接際

第一款 國ノ大權

第二款 行政權ノ總論

第三款 行政權，司法權，接際

第四款 權，抵禦

第五款 行政訴訟

第三章 行政權，眼目

第一款 公，勢力

第二款 公，安寧

第三款 公，救助

第四款 公，資財

第五款 公，風儀

第六款 公，豐富

第四章 行政權，編制

第一款 行政權編制，摸樣

第二款 行政官吏

第三款 行政官附屬，會議

第四款 行政訴訟，裁判官

第五章 緒言

佛國政法略緒言終

佛國政法略
ソムナイ、ドレニード、ドレニ
ドコス、アドミニストラチフ

第一章 總論

第一 抑、行政ノ學ハ之ニ着眼スルノ法二種
アリテ其一ハ經濟學ノ理ニ基キ以テ之ニ着眼
シ又一ハ法律學ノ道ニ據リ以テ之ニ着眼ス
經濟學ノ理ニ基キ行政學ニ着眼スル時ハ經濟
學ニ說ク所、以テ國中衆庶ノ管スル諸般ノ事
ニ適用シ又法律學ノ道ニ據リ行政學ニ着眼ス

ル時、其諸事ニ管ス。法律勅命規則等ヲ編輯
レ以テ一体、其ト為レテ所謂行政ノ法即チ改
法ヲ定ム
經濟學ノ理ヲ國中衆庶ニ管スル諸般ノ事ニ適
用スルハ猶行政學ノ理論ニ過キマレテ行
政ノ事ニ就キ名儒碩學輩ノ互ニ相雜同スル所
ノ說々レレト改法ハ之ト異トリテ行政學ヲ實際
ニ施行スル者タルカ故ニ凡ソ一世ノ諸人民
舉テ其意ヲ表明シ或ハ數世ノ諸人民ヲ舉テ其
意ヲ表明スルニ在リ

夫經濟學ハ實ニ事物經驗ノ學科ト稱ス可キ者
ト雖モ其次第ヲ言フ時、政法ノ次ニ位ス可ク
而シテ改法ヲ解釋レテ或ハ之ヲ可ナリトシ或
之ヲ否ナリトス又改法ハ原ト國中人民ノ採用スル
經濟及ヒ勸善ノ道ヲ明白詳細公平ニ夫明スル
者ニシテ今此書中ニ記スル所ハ獨リ改法ノミ
ニ限ル者トス
第二 此書ノ目的ト為ス所ハ獨リ政法ノ言ニ
限ルト雖モ其言葉ハ猶廣大ニシテ容易ナル者
ニ非ス今試ニ其概畧ヲ言ハハ先ツ夥多ク法律

勅命指令規則等ヲ集、以テ要畧シテ日令施行
ノ法ト既ニ廢棄シタル法ト、區別シ次序ヲ立
テ法則ヲ定メテ兵部類ヲ分ケサル可カラズ加
之國ノ法律如何ニ明瞭ナリトモ宰相ノ指令如
何ニ詳細ナリトモ諸般ノ事務ヲ舉ケ編ク之ヲ
網羅スルハ固ト能ク可キニ非ス殊ニ之ヲ辨明
スルニ全ク其誤解ノ憂ヲ免クル、ト能ハス又
之ヲ解説ヲ為スニ其說ノ異同ナキヲ保スル
能ハサレハ自カラ其法律指令ヲ解スレニ疑惑
爭論ヲ生スルニ至ル可シ是レ參議院覆審院ニ
コシセリニデタイ クルドカレラン

於テ其疑惑ヲ解キ宰相之ヲ爭論ヲ決断セシ所
以ニレテ即チ所謂官局傳説ノ因テ起ル所ナリ
故ニ苟モ法律ノ學ニ志ス者ハ法律勅命指令等
ヲ知ラサル可カラサルノミニ非ス又之ヲ解明
シタル彼官局傳説ヲ知ラサル可カラレハ令
此ニ政法ヲ説カント為スニモ亦其傳説ヲ記シ
以テ政法ヲ學フニ便ナラシム且其法ノ深淵廣
大ナルヲ知ラレハサル可カラス
第三 此ニ一ノ疑問アリ曰、民法商法等ハゴ
ロド法律ヲ編成スル者アリテ政法ニゴロドナキハ

其故何リヤ答テ曰ク民法商法ノ如キハ原ト人
民互相ニ管スレ私ノ權利ヲ規定セシ者ナルカ
故ニ其中或ハ人ニ因リ物ニ從テ自ラ差異ナ
キヲ得スト雖モ概テ一定シタル數箇ノ大綱目下
ニ之ヲ分類スルヲ得可ク而テ改法モ亦一定ノ
大綱目ナキニ非スト雖モ時世ノ景況ハ民ノ摸
様ニ因リ常ニ之ヲ變易セサレ能ハサレハ新
ル要需ノ起リ意外ノ事件生スル毎ニ心ス行法
ノ新法ヲ設ケサルヲ得テ故ニ若レ大綱目ノ
ヲ掲ケ以テ改法ノ「ゴ」ト為ス時ハ固テ欠完

不具者ナル可ク又瑣末ノ事ニ至ル迄詳細ニ
編成シテ「ゴ」ト作ラント欲スル時ハ時勢ノ
必要ナルニ應レ以テ改正進歩ノ道ヲ妨ク可
是レ則テ改法「ゴ」ト為シ非テ所以ナリ
第四 又政法ハ其管係スル諸般ノ事行實ニ夥
多ニレテ指數スルニ違フラス加フルニ其事件
モ亦互ニ其類ヲ異ニスルカ故ニ之ヲ合シテ一
箇「ゴ」ト作ラントスルハ當ニ其為レ非キ
ノニニ非ス亦甚々理ニ適セサルモノト謂フ可
レ然レモ私法ハ之ヲ數箇ニ分テ民法商法訴訟

法等各其「ゴ」トト為ニテ得ルカ如ク政法モ亦
行政各部ノ法律ヲ以テ各自一箇「ゴ」トト首
做ス「フ」得可レ
此ニ令政法ニ就キ「ゴ」トト名ヲ下レ得可キト
否トツ論スルハ姑ク置キ其最緊要トスル所ノ
舉「レ」ハ先ツ行政ノ律法明瞭詳細ニシテ各種
ノ公務官局ニ悉ク其規則アリ諒般ノ權利ニ悉
ク其保護アリ以テ行政ノ大器械ノ旋動運行ス
ルニ妨害ナカレレ常ニ之ヲ整齊レテ國ノ資
益ヲ為ス可キニ在リ

第二章 行政權ノ總論及ヒ行政權ト他

ノ大權トノ接際

第一款 國ノ大權

第五 夫國々ル者ハ固ト法ヲ以テ存ス可ク
ラス而シテ又萬國互ニ其法ヲ立ツルニ皆必ス
式則定例アルヲ其常トス故ニ他國ニ於テモ法
律ヲ立ル其方法ハ先ツ憲法ヲ以テ之ヲ規定レ
且其概畧ヲ舉「レ」ハ法律ノ草案ヲ作ルノ權ハ
政府ニ在ルカ故ニ參議院ニ於テ其草案ヲ作リ
下議院ニ於テ之ヲ議決シ上議院ニ於テ之ヲ憲

法ト照考シ然ル後皇帝之ヲ允准シテ國內ニ布
告ス故ニ立法ノ大權ハ數箇ニ分レ各其次序ニ
從テ法律ヲ立ルニ參スル者ナリ
第六 行政法此書中ニ行政ノ權ト記
スル者ト混ス可ラスノ權ハ皇帝
ヲ以テ其主宰トシ要ニ之ヲ分ツテ三權トス曰
ク政府曰ク行政官曰ク司法官此書中ニ
司法權ノ行政法權
中ノ一ト為而シテ此三權ノ職掌互ニ相異ナレ
者トス
政府ハ國內國外ノ權利ヲ統制シ行政ヲ獎勵シ
審判ヲ為シ且裁判官吏及行政官吏ヲ其

職ニ任スルノ權アリトス是レ則テ官吏ノ授任
ハ皇帝ノ勅ヲ以テスル所以ナリ
行政官ト司法官トハ法律ヲ施行シ或ハ適用ス
ルヲ以テ其職ト為シ又各其權限ノ區域アリ
第二款 行政權ノ總論
第七 行政官トハ政府ノ意思ヲ施行シ國中資
益ノ為メ制定シタル法律ヲ適用ス可キ諸官局
ヲ合稱スルノ名ナリ然ルニ世人往々行政官ト
政府トノ二者ヲ混合シ分別セザル者アリ是レ
蓋シ皇帝宰相等ノ如キハ政府ノ國事ヲ統理ス

ルノ權ト行政ノ權ト相兼テ握掌レ且行政ノ諸官吏ハ其等位政府ノ高官ニ次キ之ヲ視ルニ恰モ政府ト一体ナル者ノ如クナルニ因ル所ナル可レ

第八 然レ凡行政官ト政府トノ二者ハ原ト其別アルト猶意志ト行為ノ分アルカ如ク廢改ヲ統括シテ之ヲ運用スルハ政府ノ為ス所ニシテ其命ヲ奉シ之ヲ施行スルハ行政官ノ任スル所ナリ故ニ令實際上ニ就キ此二者ヲ分別スルノ必要ナルヲ了解セシム可キ為メ試ニ其一例ヲ

舉ク假令ハ此ニ一ノ法律ヲ設ケ其法律ノ文面ニ之ヲ施行スルハ州長即チ行政官ニ任スル旨ヲ分明ニ記載スト雖モ州長ハ先ツ宰相即チ改官ヨリ其命ヲ受ケタル後ニ非ハ其法律ヲ適用スルヲ得可キノ權カアルヲ思ハサル可レ蓋宰相ヨリ事ニ起ル毎ニ別段命ヲ下スニ非ス故ニ總令法律上ニ於テ行政ノ任ヲ受クル官吏ヲ特ニ指定シタルト雖モ其官吏ハ長官則チ政府ノ指揮ヲ受クルニ至ト遠敷テ其法律ヲ施行スルヲ得可カラス

第九 行政官ノ行フ可キ威權ハ初、其官局ヲ
設ケタルニ因リ泛然之ヲ授クル者アリ又ハ別
段ノ法律ヲ以テ特ニ之ヲ授クル者アリ又法律
中詳細ニ各事ヲ規定シ行政官ヲ以テ其規定セ
レ如ク毫モ己ノ意見ヲ交ヘス之ヲ施行セシム
ルヲ任ヌル者アリ或ハ唯大畧ノミヲ定メ之ヲ
施行スルニ必要ナル規則ヲ定メ行政官ニ全
ク之ヲ委ヌル者アリ或ハ行政官ニ一ノ公務ヲ
委テ其施行ノ方法ハ行政官ノ意ニ任カスル者
アリ

と
//

第十 法律上ニテ敢テ嚴密詳細ニ諸般行政ノ
方法ヲ規定セズ之ヲ行政官ノ意ニ任カスルハ
是レ其己ムヲ得ナルニ出ル者トス夫レ無数ノ
權利互ニ相抵觸レ地方ノ模様各相異ナリ諸般ノ
事件交相生スルハ固ト是レ言フ待ツサル所ニ
レテ法律ノ文ノ如キモ如何ニ明瞭詳細ナリト
雖モ或ハ亦其誤解ナキヲ保スルヲ能ハス且法
律ヲ施行スル方法モ若シ初メヨリ至嚴ニ之ヲ
定ムル時ハ亦自カラ意外ノ障礙ヲ生スルノ患
アリ故ニ行政官ニハ此等ノ諸難事ヲ解散セシ

ムノ権ヲ任カセ時ト地トノ模様ニ從ヒ適宜ニ
法律ノ施行ヲ取扱ハレムサル可カラズ故ニ世
ノ諺ニ行政ハ即チ和解ナリト是レ行政ハ時宜
ニ從ハサル可カラサルヲ評セシ者ナリ
又法律ヲ施行セシ後ニ許多ノ難事頓ニ生スル
時ハ行政官固チ初メヨリ其難事ヲ解散セシム
ルヲ能ハスト雖モ若シ其難事ニ違フテ數回ニ
及フノ後ハ最初ノ決定ヨリ生スル其不便ヲ避
ク可キノ道ヲ知り次第ニ其法律ヲ施行スルニ
便利ナル方法ヲ悟ルニ至ル可シ是レ即チ所謂

ト
12

官局傳説ノ生スル所以ニレテ蓋シ其資益ハ衰
廢ノ日ニ被レ所ト雖モ猶未ク能ク之ヲ知ル者
少ナレ
第十一 行政官ノ重大ナル職務ハ大畧尤ノ如
レ
行政官ハ法律ヲ施行スル為メ其法律ノ追加ト
省做ト可キ普通ノ規則又ハ特別ノ規則ヲ定ム
但シ其權ハ法律上ノ明許又ハ默許ヲ以テ行政
官ノ授カリシ所ノ者ニシテ其權ニ因リ定メ
ル規則ヲ名ケ之ヲ行政規則ト云フ

行政官ハ全國ノ人民又ハ其中一部ノ遵奉ス可
キ法律施行ノ法度ヲ定ム其法度ヲ行ハルヲ
監察ス

行政官ハ公私ノ廠舎ヲ設クルヲ許ルレ公舎ハ
之ヲ管照レ私舎ハ之ヲ監察ス

行政官ハ法律上ニテ己ノ掌ル物件或ハ權利ヲ
人民ニ讓リ與フ

行政官ハ必要ナル諸件ヲ人民ニ問ヒ且人口ヲ
點查シテ募兵議員選舉倍審選舉等ニ管スル姓

名目錄ヲ作ル

七
13

行政官ハ法律規則及ヒ公私ノ權利又ハ國ノ風
儀公々ノ安寧ヲ害スル諸件ヲ制止ス

行政官ハ或種ノ誑誤ヲ罰レ又輕重罪犯ノ刑罰
ヲ要求ス

行政官ハ國財ヲ支配シ租稅ヲ分賦シテ之ヲ受
取リ國益ヲ為シ己ハ得ル費用ヲ出シテ其
算計ヲ為ス

行政官ハ公同ノ資益ニ管スル造築ノ業ヲ興
又ハ人民ノ其業ヲ興スヲ監察シ又公同資益
為シ人民ノ私產ヲ徵收ス

行政官ハ人民ヨリ額出ル所ノ吟味ニ道理アレ
ハ之ヲ聞届ケ且己レノ行ヲタル所置ニ付キ生
シタル争ヲ審判ス

行政官ハ貧困微弱ニシテ自カラ生業ヲ營ハ、
力ナキ者ヲ救恤保護ス

行政官ハ政府ノ大權ト抵觸スルトナク諸般ノ
官吏ヲ進退褒貶シテ且其職事ヲ諭示シ其監察
ヲ為シテ之ヲ獎勵シ或ハ之ヲ責罰ス

第三款 行政權ト司法權トノ接際

第十 行政官ト政府又ハ立法官トノ接際ハ

今此之ヲ詳細ニ説クニ及ハス而シテ前ニ説ク

ルカ如ク政府ト行政官トノ接際ハ猶頭ノ手ニ

於ケルニ似テ又行政官ハ直ニ立法官ト相接ス

ルトナク必ス政府ノ手ヲ經テ然レ後之ニ接ス

ル者トス

第十三 行政官ト司法官トノ接際ハ更ニ錯雜

ニシテ判然分明ナラサル所アル者トス蓋シテ行

政司法ノ二者ハ共ニ同シク行政權ル前ニ記シテ

見ル可キカ如ク行政權中ニ司法ノ部中ニ在テ相

並立ニ相管スルトナク互ニ相助ケ互ニ相全ウ

不可キ者ケルカ故ニ此兩者ハ共ニ國ノ為メ欽
ク可カラサル者トシ而シテ其性質、權力、眼目、處置
ノ方法ニ於テハ互ニ相異ナル者トス
性質ノ異ナルヲ論ス（司法官吏ハ即チ終身其
職ニ在リ裁判官ニシテ行政官吏ハ常ニ其職ヲ
罷ラレ、替ナリ）

権カノ異ナルヲ論ス○行政官ハ其権限内ニ於
テハ法律ヲ起草スルノ權ヲ有シ他ノ求メテ受
ケスレテ自カラ事務ニ取掛ルトテ得可、且法
律ノ執行ニ必要ナル法度ハ之ヲ設立スルヲ

と
15

得可ニト雖モ司法官ハ必々他ノ求メテ受ケ然
ル後其事ヲ處置ス可、且縱令一事ト雖モ敢テ
自カラ新クニ規定スルノ權ナク惟此人ト彼人
トノ間ニ生スル其爭ヲ審判スルニ然レモ其
審判ハ確然不校ノ者ニシテ之ヲ廢ス可ク又
眼目ノ異ナルヲ論ス（行政官ハ衆庶公同ノ權
利ヲ預カルテ其職務トシ司法官ハ此私ノ權利
ト彼私ノ權利ト其間ニ生スル難事ヲ鮮叙スル
ヲ其職務トス又行政官私ノ權利ニ管レ司法官
公ケノ權利ニ管ムルカ如ク見エト時モ其區別

亦判然ニ行政官私ノ權利ニ管スルカ如ク見
エル時ハ平民ノ權ト共同ノ資益ト相抵觸レテ
而ノ全國人民ノ普ノ循奉ニ可キ法律ヲ適用ス
可キニ在テ司法官公トノ權利ニ管スルカ如ク
見エル時ハ國ヲ以テ恰モ私ノ權利ヲ防護スル
一箇ノ平民ノ如ク者做ス可キニ在リ
處置ノ方法ノ異ナルヲ論ス。夫司法官ノ事ヲ
處置スル方法ハ嚴格ニシテ急テサレヲ要旨
トシ行政官ノ事ヲ處置スル方法ハ簡易ニシテ
速ナルヲ主トス

と
16

第十四 斯ク行政司法ノ二官其職務トスル所
原ト大差別アリト雖モ日々發生スル諸般ノ國
事ヲ處置スルニ當テハ此二官互ニ相管ニ相接
スルト亦少ナレト謂フ可カラズ故ニ國ノ財產
及ニ廣大ナル公舎ノ財產ニ付キ爭訟アル時ハ
行政官之ニ代テ裁判所ニ出テ且裁判所ノ費用
ハ行政官之ヲ供備シ裁判所言渡ノ執行ハ行政
官之ヲ取扱ヒ裁判所官吏公證人、代書師、行政
官之ヲ選任監察ス
又司法官ハ行政官ノ立テガニ規則ヲ適用シ行

政官吏、陳述又ハ誓詞ヲ書記シテ之ヲ公シ、
證ト爲レ又國ノ財産若クハ記録稅ニ管スル訴
ヲ審判シテ且海關稅及ヒ關稅規則ニ違背スル
罪ノ如キモ亦之ヲ審判ス

第四款 權ノ抵觸

行政ノ權ト司法ノ權トハ其職務ノ權限之ヲ視
ルニ互ニ判然タル區別アルカ如シト雖モ時
リテ其權互ニ相抵觸シ其區別ヲ立ル、甚ク難
キニ至ルコトアリ而シテ其權ノ互ニ相抵觸スルハ
其方法ニアリ即チ一ハ行政司法ノ二者互ニ其

と
17

管轄ヲ争フニ在テ之ヲ實ノ抵觸ト云ヒ又
一ハ行政司法ノ二者互ニ其管轄ニ非ナルヲ論
スルニ在テ之ヲ虚ノ抵觸ト云フ
立君政体ノ國ニ於テハ權ノ抵觸ヲ裁斷スルノ
權何者ニ屬ス可キヤ此論ヲ決スルト容易ナル
カ故ニ初メ佛國ニ於テ三大權ヲ分別シタル時
千七百九十年第十月七日ノ法律ヲ以テ此一事
ヲ容易ク決定シタリ蓋シ其定ムカレ所ニ於テ
ハ此抵觸ヲ裁斷スルノ權帝王ニ在テ帝王ハ原
ト行政司法二官ノ長トシテ其裁斷ノ權ヲ握ル

一甚々適當ナリトス

第十六 前ニ記スル道理ハ唯法式上ノミニ管
スルカ如シト雖モ更ニ他ノ奧妙ナル道理アリ
是レ蓋シ司法官ヲレテ行政官ノ討論ヲ為スニ
管セズ訴訟ヲ裁判セシムル時ハ恰モ行政官ヲ
司法官ノ附屬ト為レ司法官ニ一般ノ規則ヲ立
ル權ヲ授クルニ似タルニ在リ而シテ斯ノ如キ時
ハ國民ノ最モ貴重ナル權利ヲ預カル行政官原
ト其職務ノ責ニ任シ常ニ其職ヲ罷ラレル可キ
者タルニ彼終身職ニ在テ職務ノ責ニ任セサル

司法官ノ為ニ抑制セラレ、カ如キ弊害ヲ生ス
可ク然レモ又司法官終身在職ノ制度ヲ廢スル
時ハ司法官忽チ行政官ノ管下ニ落ルノ弊害アリ

第十七 此弊害ヲ除クニカ為ニ行政ノ官吏ハ
其職掌上ノ處置若クハ其権限内ノ所為ニ就テ
ハ朝廷ノ允許ナクシテ其罪ヲ裁判所ニ告訴ス
可カラサルノ制度ヲ設ケタリ

第五款 行政訴訟

第十八 前ニ記セタル行政官ト司法官ト其權

ノ相抵觸スルハ人民私ノ權利ニ管スル事ニ限
ルト雖モ原ト國ナル者ハ人ヨリ成リ行政官ハ
其人民共同ノ資益トナル可キ制度ヲ立ル者ヲ
レハ之ヲ為ノ其權又人ノ私ノ權利ト相抵觸
スルト稀ナリトセズ加之行政官人々ノ固有ッ
ル正當ノ權利ヲ害スルニ因リ之ヲ為メ人々ノ
告訴ス可キ事亦少ナカラサレハ若シ斯ノ如キ
事アル時ハ其爭訟ヲ審判スルノ權ハ誰ニアル
可キヤ今尤ニ之ヲ説カントス

第十九 前ニ記セシ如ク行政官公ノ權利ノ

為メ處置スル所ノ事人々私ノ權利ト抵觸スル
トアリ又ハ行政官ノ處置人々ノ固有タル正當
ノ權利ヲ害スルトアリテ若シ行政官公ケノ權
利ヲ為メ處置スル所ノ事人々私ノ權利ト抵觸
スル時ハ其損害ヲ被リシ人ヨリ上等ノ行政官
ニ歎願シ其特權ヲ以テ公ケノ權利ト私ノ權利
トヲ公平ニ折衷シ相和セシムルヲ希フノ外他
ヲカル可シ

又行政官ノ處置人々ノ固有スル正當ノ權利ヲ
害スル時ハ其害ヲ被リタル者歎願ヲ為スノミ

ヲ以テ足レリトス可キニ非ス是レ人々ノ為メ
至重ノ權利ヲ認ムルト否トヲ官吏一箇ノ意見
ニ任カスルハ甚タ道理ニ適セサル者タルニ因
ル故ニ此時ハ人々唯歎願ヲ為レ以テ己ノ權利
ヲ護ス可キノニ非ス必ス訴訟ヲ為レテ審判
ヲ乞ヒ當然其權ヲ護スルニ在リ是レ則チ行政
訴訟ノ起ル所以ニシテ又之ヲ審判スル裁判所
ヲ設ケサルヲ得サル所以ナリ
第二十一 行政訴訟ノ事ハ行政ノ學術上ニ於テ
モ又實際上ニ於テモ最大ノ一難事ニシテ其訴

訟ノ性質ヲ解明セントスルニハ一大家ノ語ヲ
引抄スルヲ以テ最良ノ法トスゴビヤン氏ノ政
法論ヨリ抄出ス
其語ニ曰ク

行政訴訟トハ行政官其遵奉ス可キ法律及ヒ
規則ニ從ヒ自カラ執行ヲ可キ所ノ義務ニ背
キ或ハ其人民ト結ビタル契約ノ義務ニ違フ
ニ曰リ人民ヨリ之ヲ告訴スルヲ云フ故ニ若
シ行政官事物ノ管轄ヲ定ムル法律又ハ處置
ヲ為スノ法式及ヒ決定ヲ為スノ規則ヲ定ム
ル法律ニ違ヒ其事物管轄ノ方ヲ顛倒シ或ハ

其法式規則ニ背クノ証ナル時ハ之ヲ訴ヘテ
行政訴訟ヲ為ス可ク又行政官ノ人民ト結ビ
タル契約ニ背キレ時モ亦之ト相同シ是レ則
テ行政訴訟ノ起ル所以ニレテ此訴訟ノ性質
ハ通常ノ可法官ニ上告スル訴訟ト相異ナリ
テ亦通常ノ行政事務トモ異ナリ故ニ自カ
一箇特別ノ事務ヲ成ス者ト謂フ可シ
此ニ行政訴訟ト稱ス可キ諸般ノ事件ヲ集メ
編成セントスルノ論アリ然レモ是レ殆ント
為レ難キ事業ニレテ若シ此業ヲ為シテ欲セ

ト
21

ハ先ツ数千ノ行政法律ヲ一箇管ニ取調ヘ人
民ニ行政訴訟ヲ許ルヌノ権アルヤ否ヲ検査
シ且此行政訴訟ハ某ノ官署ノ審判ニ任カス
可キヤ彼行政訴訟ハ某ノ官署ノ審判ニ任カ
ス可キヤ此等ノ事ヲ各自ニ定メサル可カラ
サレハ真ニ大難事ニ屬シ而テ縱令能ク此業
ヲ為シ得ルモ新ニ法律ヲ立ル毎ニ更ニ行政
訴訟ノ事件ヲ増加ス可キカ故ニ其業竟ニ完
全ノ者ニ至ラサル可レ故ニ行政訴訟ノ事件
ハ其數擧テ莫ク難ク且常ニ増減アルニ因リ

立法者己ノ意ヲ以テ此事ハ行政訴訟中ニ加
フ可ク彼事ハ其中ニ加フ可カラサルヲ定ム
ルト雖モ顧ミルニ一事ヲ遺サス之ヲ網羅シ
得可キニ非キレハ各事ノ種類ト性質トニ因
リ以テ其行政訴訟中ニ加フ可キト否トヲ定
メサル可カラス此ニ由テ之ヲ考フレハ行政
訴訟ハ其諸般ノ事件ヲ編輯レ以テ一定ノ法
ヲ作ルト幾ント為レ難キ所ト雖モ要スルニ
行政訴訟ノ諸事ハ亦自カラ相合レ猶一箇ノ
コトト為スニ似レルカ故ニ其諸事ニ管ス

レ
22

ル律法ト其大旨トヲ以テ行政ニ通法ト為ス
可キト猶民法ヲ以テ人民私權ノ通法ト為ス
可キカ如レ

第二十一 佛國ノ法律ハ當然行政訴訟中ニ屬
ス可キ事件ヲ減省スルトナク却テ之ヲ増加シ
國ヲ治ムル行テノ最大事件ヲ行政訴訟ノ事
件中ニ加ヘ其審判ノ權ヲ行政ノ長官ニ委スル
ル者アリ
第二十二 通常ノ裁判所ノ外彼行政訴訟ヲ審
判スル特別ノ裁判所即行政官署ヲ設クルノ必要ナ

ル事情ハ近日不幸ニシテ没シタル高名學士ノ
語ヲ以テ之ヲ解ス可シ因テ今尤ニ其語ヲ記ス
法論ニ抄出ス

通常ノ訴訟ニ於テハ原告被告同一ノ權利司
一ノ名義以テ互ニ相對シテ討論シ敢テ其
權利ニ強弱大小ノ異ナルトナレト至モ行政
訴訟ニ於テハ一方ハ私ノ權利ヲ稱シ一方ハ
公ケノ權利ヲ護スルカ故ニ敢テ律法ヲ枉ッ
ルニ非レトモ稍其律法ヲ適用スル方法ヲ變
易シ以テ便宜ヲ得セシメサルコトヲ因テ

ト
23

令一例ヲ舉ケ此二箇ノ訴訟相ノナル可キノ
事由ヲ説クニ此ニ或レ大道中ニ突出シタル
一家屋アリ之ヲ官ニ買上ケント欲スルニ其
所有者之ヲ肯セサルカ故ニ行政官吏ヨリ之
ヲ上等裁判所即チ通常訴訟ニ告訴スル時
其長其訴ル所ヲ聽サス嚴然トシテ曰ハシ
此家ノ依然トシテ存立スルハ即チ仙國ニ於
テ法律ノ公平ナルヲ毫モ枉ク可カラサルノ
証ナリト是レ蓋シ司法官ノ斷然法ヲ執テ枉
ケサルノ意ニ出ル所ナリ然レモ此ノ如クナ

レハ甚ク國ノ為ニ不便ヲ生ニ可キニ因リ各
シ其訴ヲ行政訴訟ノ裁判所ニ為メ時ニ即チ審
判シテ曰ハシ此家ハ大道ニ突出シテ衆庶ノ
往来ヲ妨クルカ故ニ其所有者ノ意ニ管ニ
之ヲ官ニ上ク可シト是レ則チ行政訴訟裁
判所ノ趣旨ト為ヌ所ナリ又一例ヲ舉グルニ
此ニ一ノ匠エアリ家屋ヲ築造スルノ請負契
約ヲ為スニ若シ築造ヲ為サレムル者其契約
ニ背ク時ハ其匠工其現ニ被リタル損失ノ償
ノミニ非ス亦其期望スル利得失ヲタル償

ヲ求ム可シ是レ民法ノ規定ニ所ニレテ司
法官ハ必ス此法ヲ遵守ス可シ然ルニ行政官
若シ匠工ト結ビタル契約ニ背ク時ハ匠工唯
其現ニ被リタル損失ノ償ヲ得ルノミニ過キ
サル可ク是レ則チ行政訴訟ヲ審判スルノ旨
趣ニレテ行政訴訟ヲ裁判スル其要旨ヲ
概言スレハ國トハ原ト全國人民ヲ合稱スル
ノ名ニレテ官賤ハ即チ全國人民ノ財ヲリ而
テ行政官ハ其國ノ權利ヲ護ニ其官賤ノ處分
ヲ為ス者タルニ因リ行政官ノ權ハ之ヲ各人

ノ私権ニ勝リタル者ト者做シ強テ律法ニ背
カサレハ行政官ノ権ヲ先ニシ人々ノ私権ヲ
後ニスルニ在ルナリ
行政訴訟裁判所ノ事ハ第九十三以下ニ審
リ

第三章 行政権ノ眼目

ノ事二十三 夫レ行政官ハ子ノ生ルハヤ蓋ニ之
ヲ身上證書ニ記シ若シ孤子ナレハ之ヲ養育シ
又兒童ノ教導修業ヲ監督シテ其長シテ人ト成
ルノ後ハ國ヲ防護スル兵籍中ニ編入シ畢生間

常ニ其權利ヲ保護シテ之ヲ毀管ハサルヲ又
其既ニ死スルニ至テハ死去ノ證書ヲ記シテ墓
中ニ静息スルヲ得セシメ實ニ人民ノ為メ一ト
シ 缺ク可カラサル照管ヲ為ス者ナリ
又行政官ノ職務ハ特ニ此等ノ照管ヲ為スルニ
ニ限ラス各人私ノ權利ノ外所謂真ノ共同ノ權
利ナル者ヲ管照シ而シテ此權利ハ即チ全國人民
ヲ合シタル國ノ權利ニシテ自カラ實際上一ニ於
テ人民ノ私権ト大ニ其類ヲ異ニシ行政官又ハ
政府ハ其自國人民ノ侵奪或ハ外國ノ攻撃ニ對

レ此國權ヲ防護セサルヲ得サレト聞、少ナレト
セス

此等總テ行政官ノ掌ル諸事ハ其數實ニ夥多ニ
レテ固ト一概ニ了解レ得可キニ非レハ其職掌
ヲ分テ數種ヲ為シ各種毎ニ其大畧ヲ記ス可キ
カ故ニ其委細ハ特ニ其各種ニ管レタル條下ニ
就之ヲ見ル可シ但レ此書中ニ
此ニ今行政職務ノ主自タル者ヲ掲グルニ其要領
トスル所ハ國ノ勢力、安寧、救助、公賤、風儀、豐富ニ
在リト云因テ今次序ヲ逐々之ヲ説ク事尤ノ如

第一款 公ノ勢力

第二十四 抑國ノ初ノテ興ルノ際ハ終カニ微
々タル小部落ニ過キサルカ故ニ行政官又ハ政
府(蓋シ此際ハ政府ト行政官ト別ナレ)ノ職務
タルヤ唯近隣ノ部落ヨリ我ヲ攻撃スルヲ防禦
スルノ外ナク且人口寡少ニレテ國中ノ交際甚
々紛雜ナルトナレ然レモ人口ノ寡ナキカ故ニ
亦外寇ノ俄然侵来スルヲ危難甚ク大ナリトス
國ノ次第ニ盛大隆盛トナレ至リレ後ハ外寇ノ

恐大ニ減シ其頓ニ我ヲ滅スルコト如キハ敢テ畏懼スルニ足ラスト雖モ外寇ノ危害ハ猶一瞬時モ之ヲ顧慮セサル可カラズ故ニ當今他國ニ於テ外寇ヲ防禦スル三省ヲ設ケリ則チ其省ハ外務陸軍海軍ノ三箇ナリ

第二十五 外務省 ○外務省ハ我ト他邦トノ交際ニ取扱フ器具ニシテ平和ノ際外國ニ於テ我國人ヲ保護スルノ任ハ此省ニ屬ス。 辦理公使ニ在リトス

第二十六 陸軍省 ○陸軍省ハ陸軍ヲ管轄シ兵

士ノ募集衣服飲食陣營教導健康等ノ諸事ヲ統制シ士卒ヲ各所ノ城砦ニ分遣シ外寇アレハ之ヲ防戦ス可キ者ヲ定ム蓋シ將師ヲ擇ムハ政府ノ任ニシテ戰ノ勝敗ハ將師ノ撰擇其宜キヲ得タルト否トニ管スルト雖モ數年間ノ大戦ニ於テ終ニ捷ヲ奏スルニ至ルハ多クハ陸軍省ノ力ニ因ル者トス

又彼護國兵ハ内務省ノ管轄ニ屬スル者ト雖モ亦公ケノ兵力ノ一部ナリハ此ニ之ヲ記セサルヲ得ス

第二十七 海軍省 ○夫ハ海軍省ノ海軍ニ於テ
ルハ猶陸軍省ノ陸軍ニ於ケルカ如ク而シテ陸軍
ハ内乱ヲ鎮定スル為メ其力ヲ貸與スルト間少
ナラス又所謂備警兵アリテ專ラ國內ノ靜謐ヲ
保守スルト雖モ海軍ハ之ト異ナリテ遠ク海外
ニ赴キ國旗ノ榮名ヲ保持シ又ハ國ノ威昌ヲ基
タル高船ヲ防護スルヲ以テ其常トス

